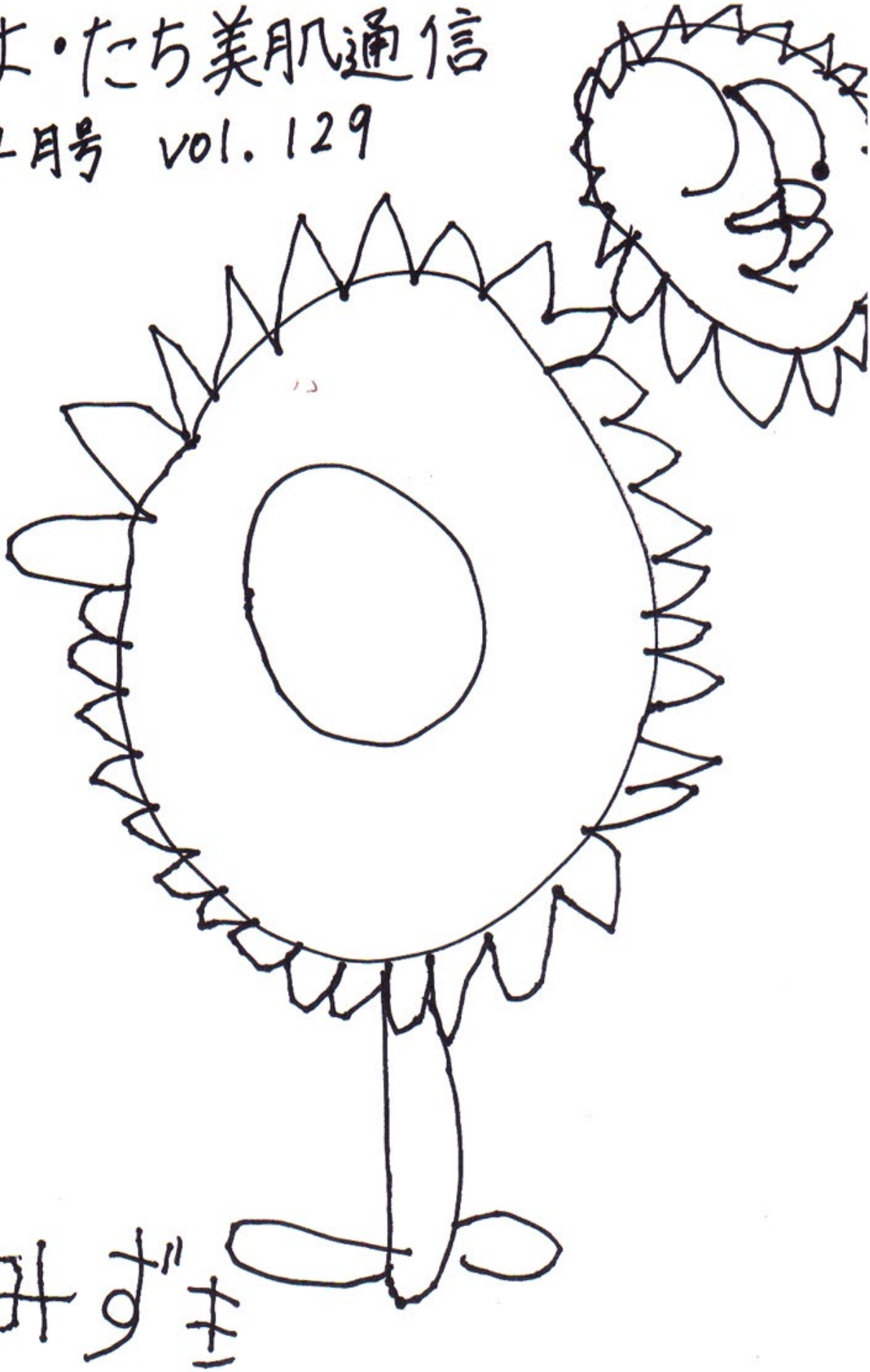
とよ・たち美肌通信

4月号 vol. 129



みずき

April

今月号のとまたち美肌通信の表紙は、

大きな大きなお花です！とっても元気に

咲いていますね。暖かくなりお花も

きれいに咲き始める季節になりました。

今年の2月号の表紙を描いてくださった

男の子の弟くんが4月号を描いてくださ

いました♡

ダンスやかくれんぼをする事が好きで、

お兄ちゃんが大好きな男の子です！

院長はじめスタッフ一同

心より感謝いたします

人生において努力が報われない事は度々起こり得る。時に人生で起こる事象は不公平の連続とも言え様。しかしこれは自分のある一時期の更に一点だけを捉えた見方であると同時に、自分を物事の中心に据えて内から外を見た一方的な見方である。自分に振りかかった不幸とも言える事象は視点を変えると違う答えがあるのではと、別の角度からの見方を思考の中に組み込む訓練が大切となる。悲しい・つらいという感情は、その中に埋没すると出口が無い様に思えてしまう。
しかしもっと別次元から客観的にその事象を考える練習をすると「最悪な事象」と思っていた事も後から考えれば「最良な出来事」であったというものは長い人生いくらでもあり得るのです。

これに纏わる物語りを紹介します。

ある男が旅ををしていた。男は犬と羊を連れ、聖書を読むためのランプを持っていた。一日歩き続け陽もとっぷり暮れたので、その夜泊まる所を探した。ほどなく粗末な小屋を見つけてそこで寝ることにした。しかしまだ寝るには早いので、ランプを灯して聖書を読むことにした。するとまだ残っていると思って

いたランプのオイルが切れて、灯りがふっと消えてしまった。男はしかたなく早目に寝ることにした。その夜は本当に悪いことが重なった。連れていた犬が毒虫に咬まれて死んでしまった。次にオオカミが来て、羊も殺して食べてしまった。朝になって男は空腹のまま出発した。乳をくれていた頼りの羊もいない。少し歩いてある村の近くに来ると、男は異様な気配に気づいた。人影が全くない。よく見るとあちこちで村人が惨殺されていた。前の晩に盗賊がやって来て村人達を殺し金品を奪って行ったことを知った。彼は恐ろしさに打ち震えながら思った。もしランプが消えていなければ、自分も盗賊に見つかっていたはずだ。犬が生きていたらキャンキャン吠えて、やはり見つかっていた。羊も騒いで音を立てたに違いない。"全てを失っていたからこそ、自分は助かったのだと"。そこで男は深く悟った。「どんなに災難がこようと希望を見失ってはいけない。最悪なことが最良なことだと信じ様と」。

物事には多岐にわたる側面がある。善と悪、不幸と幸福、これらは常にセットになっていて、形を変えて人生に降り注いでくるのである。幸福と思ったものが実は失敗の元であったり、逆にピンチがチャンスの兆しかも知れない。自分から見た見方ではなく、次元を変えた見方をすれば（もしくはそれが出来る様になれば）、不思議と物事を前向きに受け入れられる様になるであろう。

院長 拝